支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「洗い場」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

先月号に掲載した実家前の川の続きです。

正門の前の川へ、階段を降りていくと洗い場がありました。一畳分ほどの広さだったでしょうか。石版でできていました。脇には一段低い小さい石版があり、川の水位が下がった時は、そこで洗いものをしました。

主に土の付いた野菜類や農具を洗いました。また、竈（かまど）の生活でしたので、鍋釜の煤けた底も洗っていました。釜洗いとともに、当然ご飯粒なども落ちるため、鮒（フナ）たちの格好のえさ場であり、青田少年にとっても格好の釣り場でした。

洗剤も当然自然のもので、灰や砂が石版の脇に常にありました。また、タワシ代わりに荒縄を丸めたもの（わが家では〝モダラ〟と称していました）がありました。それから、芋などを一度に多く洗うためでしょうか、かき混ぜる木の棒も近くの垣根につり下げてありました。その棒は、木の皮をむいた30～40センチメートルのもので、突起物として幹から何本かの枝（長さ4～5センチメートル）が付いたものでした。

今も時折、〝おへそく〟（神棚にあるひらひらの和紙が竹に付いたもの）を洗い場近くに差しますが、ここは生活には欠かせない場所であり、それ故、水の神様が宿るところとされていました。

よく行っていた隣の家には、ちゃんとした呼び名は今も分かりませんが、「三段洗い場」がありました。手押しポンプの脇にある古いコンクリートで三区分された水槽で、段々田んぼのように一段目の水槽のうわ水が、二段目の水槽に流れ落ちるようになっていて、さらに同じように二段目のうわ水が三段目に流れ落ちるようになっていました。

ポンプからの注ぎ口の水は、もちろんそのまま飲むことができ、一段目の水槽では最も汚れていないものを洗い、二段目では次のレベルのものを洗い、三段目は最も汚れているもの、例えば土の付いた農機具とかを洗ったものです。つまり、水を大事に使う生活の知恵からきた洗い場でした。

当時、幼なじみの家の洗い場とはいえ、何かを洗おうとした時、どれで洗おうか、子どもながら慎重に考えた記憶がよみがえります。

老眼の身になった今でも、まぶたの奥には手押しポンプから流れ出るあの水の決してセピア色ではない、清らかな色をした輝きが残っています。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める